自治体名：青森県

自動運転社会実装推進事業

最終報告書（公開版）

**【事業背景・目的】**

青森県十和田市に位置する奥入瀬渓流では、上質で豊かな自然環境の保全を主目的に、奥入瀬（青橅山）バイパス事業が進められている。バイパス開通後は、奥入瀬渓流と並行する国道を通年通行規制する予定であり、その区間に新たな交通を導入する計画である。

本事業では、将来国道が人中心の空間へ転換し、その中をグリーンスローモビリティ等が自動運転走行することを想定し、高付加価値化した自動運転実装に向けてモビリティやインフラ要件を抽出することを目的とした。

**【事業内容】**

■　運行場所：青森県十和田市　国道102号奥入瀬渓流区間（交通規制区間）

■　ルート：①石ケ戸ルート（約2.8km）、②子ノ口ルート（約4.0km）の２ルート運行

■　実施期間：2024/10/21-27（①10/21-27、②10/23-27）※交通規制期間中に実施。

■　レベル2(自動運転技術的にはレベル４相当)

■　乗降地点：７か所

■　信号連携箇所：０箇所 （想定コース内、信号なし）

■　路車協調箇所：０箇所

■　①石ヶ戸ルート車両：MiCa（１日平日4便、休日4便運行）

　　 ②子ノ口ルート車両：GSM8（１日平日3便、休日4便運行）

**【検証項目・検証方法】**

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 項目 | 検証項目 | 検証方法 |
| 経営面 | 運賃収入の検討 | 利用者から満足度・支払い意思額のアンケート調査実施。 |
| 運賃収入以外の検討 | エコツアーガイドを乗車させ、高付加価値化を図った状態で支払い意思額のアンケート調査を実施。  協賛金や協力金といった料金徴収の検討を行った。 |
| 技術面 | 検証ルートでの自動運転率 | 手動介入時において、運行に同乗した係員による目視での記録から算出 |
| 社会受容性面 | 社会的意義・利便性・安全性の理解促進 | 啓発（看板、路面サイン、モニター掲示、チラシ）を実施の上、認知率のアンケート調査。 |

**【検証・分析結果】**

■経営面

自動運転率は石ヶ戸ルート98.02%、子ノ口ルート91.20％であった。比較的高い自動運転率であったが、観光名所やバス停など観光客が多い場所では歩行者起因の手動介入があり、レベル４実装に向けては、自動運転率を高める走行空間創出が課題である。また、国立公園特別保護地区である奥入瀬では道路周辺に観光資源である植生が多く、それを避けるため中央線寄りに走行ルートを設定したため、大型バスとのすれ違い等で急ブレーキとなった。なお、通信環境がなく、走行ログデータが取得できず、車内同乗した保安員の目視による人的な記録となる。

試乗車（232人、N=150）にアンケート調査した結果、運賃の支払い意思額は平均572円、中央値400円であった。今回の試乗車が平均572円を支払った場合の収入は約132千円であり、運賃収入だけでは自動運転の事業継続が難しい。

そのため、運賃収入以外の収入としてエコツアーガイドが同乗し、奥入瀬の成り立ちや環境をテーマとしたガイディングで、単なる移動ではない奥入瀬ならではの高付加価値化した移動を提供した。試乗車(232人、N=146)にアンケート調査した結果、エコツアーガイドが乗車した場合の支払い意思額は平均2,692円、中央値2,000円であった。試乗車が平均2,692円を支払った場合の収入は約625千円と、支払い意思額の増加がみられたものの、事業継続が必要な水準に達していない。今後、エコツアーガイドの価値を高めるブランディングとともに、環境保全等も踏まえた協力金の徴収、協賛など幅広に検討していく必要がある。

グラフ, サンバースト図

自動的に生成された説明グラフ, サンバースト図

自動的に生成された説明

■技術面

■社会受容性面

試乗者（232人）へのアンケート調査の結果、自動運転試乗者の自動運転に関する認知率は56％、非利用者の認知率は30％に留まった。また、自動運転導入に向けた課題や不安感など、具体的にどこに危険を感じたか、自動運転への印象などを集計した。危険と感じる部分では、手動介入時の急ブレーキが回答として高く技術的に改善できる部分もあるが、引き続き走行空間及び歩車混在について対応検討していく必要がある。

